

理由のありえない共同行為

——二種類の共同行為と共同主体の有無——¹

鈴木 雄大

本稿の問題意識は、個人による行為に関して G. E. M. アンスコムが提案した規準（これについては第1節で見る）と同様のものが共同行為に関しても成り立つか、という点にある。アンスコムの規準を共同行為の場面に応用する論者に柏端がいるので、彼の議論を参照する。そのなかで私は、アンスコムの規準が応用できないような共同行為のケースがあることを指摘する（第2節）。その上で、共同行為にはアンスコムの規準が応用できるもの、すなわち理由がありうるものと、応用できないもの、すなわち理由がありえないものとの二種類があると考え、さらに両者の違いを共同主体が存在するか否かの違いとして説明する（第3節）。

1. 個人による行為に関するアンスコム規準

分析哲学における行為論の草分けとされるアンスコムは、意図的に手をあげるといような行為を、意図的に手をあげたわけではないような場合からいかに区別するかという行為論の中心問題の一つに対して、前者は理由によって説明されうるものであるのに対し、後者はそうでないとするこで回答した。つまり彼女によれば、手をあげるという意図的行為の場合には、たとえば「陽を遮るため」のように理由によって説明できるものであるのに対し、たとえば袖を引っ張られて手があがってしまったような場合には、そのような説明を与えることができない。こうしたアンスコムの考えを反映した次の定式——「アン

¹ 本論文の初稿は、本報告書への寄稿者の一人である鴻浩介氏より多くの有益なコメントを受け、それらは最終稿へと反映された。氏に感謝申し上げます。

スコム規準」と呼ぼう——は、行為の概念にとって理由の概念が密接な関係にあることを示している。

アンスコム規準 x は ϕ という記述のもとで a による意図的な行為である
 $\Leftrightarrow x$ についての「なぜあなたは ϕ するのか」という問いが a によって拒否
されない

たとえば私の手があがっていることに関し、それが「陽を遮っている」という記述のもとで私による意図的な行為であるのは、「なぜあなたは陽を遮っているのか」という問いを私が拒否しないとき、そのときにかぎる。アンスコムによれば、「なぜあなたは陽を遮っているのか」という問いが私によって拒否される場合には、少なくとも次の三通りがある。² (1) 私が「陽を遮っているとは知らなかった」と答える場合。行為者は何かをしているのなら、何をしているのかを知らなければならない。(2) 私が陽を遮っていることを観察によって初めて知った場合。仮に陽を遮っていることを私が知っていたとしても、もしそのことを見て初めて知ったのだとすれば、私が意図的に陽を遮っているはずがない。行為者は何かをしているのなら、そのことを観察によらずに知らなくてはならない。(3) 私が手があがったことを原因によって説明する場合。たとえばびっくりして手があがってしまったとしたら、私は手があがったことを説明するもの(私がびっくりしたこと)を観察によらずに知ることができる。アンスコムが「心的原因 (mental cause)」(Anscombe, 1957: 16) と呼ぶものが関わる場合を排除するためには、この第三の条件が必要となる。

ちなみに、上のアンスコム規準の一部が「問いが a によって答えられる」ではなく、「問いが a によって拒否されない」となっているのは、たとえば授業中ノートにいたずら書きをしているのに対して「なぜ」と問い、「特に理由はない」という答えが返ってくるようなケースを許容するためである。いたずら書きをすることも立派な意図的行為であろう。アンスコムによれば、「特に理由はない」と答えることは、「いくらお金を持っているのか」という問いが「持

² 柏端 (2007: 146) を参考にした。

っていない」という答えによって拒否されたことにならないように、「なぜ」の問いを拒否しないのである（Anscombe, 1957: 25）。

2. アンスコム規準の共同行為への応用

以上では、私個人による行為のみが問題となっていたが、行為には複数人によって行われるものもある。たとえば、二人で一緒に散歩すること、数人で家の壁をペンキで塗ること、大勢でピザを分け合って食べることなどがその例である。そのように複数人によって共同でなされる行為は共同行為と呼ばれ、何かが共同行為であるための条件については様々に論じられてきた。本稿ではそのうち、先のアンスコム規準を共同行為の場面にも応用している柏端（2007）の議論を取り上げて検討したい。共同行為の条件が、意図や知識といった心的状態や、特有の規範性のうちに主に求められてきたのに対して、柏端の論考は共同行為を理由の概念と結びつけている点で興味深いものとなっている。もし共同行為についての研究の動機の一つが、それによって行為一般についての理解が深められることへの期待にあるとするならば、個人による行為に関するアンスコム規準が共同行為にも応用可能かを検討することは、その動機に見合った作業となるだろう。共同行為も、個人による行為と同じように、理由の概念と密接な関係にあるものなのだろうか。

2.1. 柏端の議論

柏端は何かが共同行為であるための条件として、個人による行為に関するアンスコム規準を以下のように応用したものを挙げている（柏端, 2007: 149）（共同行為に関するものは「アンスコム規準*」と記す）。

アンスコム規準* x は ϕ という記述のもとで a, b, c, \dots による共同行為である $\Leftrightarrow x$ についての「なぜあなたたちは ϕ するのか」という問いが a, b, c, \dots の誰によっても拒否されない³

次のような状況を想定してみよう。 a, b, c の三人が雪のなか車に乗っていたが、スリップして路肩の雪だまりに突っ込み、そのまま動けなくなってしまった。三人は仕方なく車を降り、トランクからスコップを取り出して雪かきを始める。このとき通行人が「なぜあなたたちは雪かきをしているのか」と三人のうちの誰に尋ねても、尋ねられた者は「車を動かすためだ」や「車がスタックしてしまったからだ」などといった何らかの適切な答えを返すだろう。確かに、 a, b, c の誰もがこのように答えることで問いを拒否しないなら、彼らは「 a と b と c は雪かきをしている」という記述のもとで共同行為を行っていると言えるだろう。

ではここにおいて「なぜ」の問いが拒否される場合とはどんな場合であろうか。柏端はそれに関し、上述の個人による行為に対して問いが拒否される場合にある程度対応した形で述べているので、ここでは彼が用いる例を援用しながら見ていこう。⁴ 太郎と花子が同じ一枚のピザを食べている。ところで、このピザはピザハットのピザだでしょう。このとき、「なぜあなたたちはピザハットのピザを食べているのか」という問いが拒否されるのは、次のような場合である（以下では太郎が問いを拒否する場合のみを記すが、同様のことはもちろん花子についても言える）。(1) 太郎が「僕たちはピザハットのピザを食べているなんて知らなかった」と答える場合。このときには、確かに「太郎と花子

³ 柏端による実際的な定式化は、行為が身体的出来事であるという彼の前提を含んだものになっているが、本稿では行為が身体的出来事であるかに関してはオープンな形で定式化した。

⁴ 以下の (3) には先の「原因によって説明する場合」の代わりに別のものが挙げられている（柏端も同様に論述している）が、それは「なぜあなたたちは ϕ するのか」という問いが原因による説明によって拒否される場合が極めて不自然なものだからである。その例としてかろうじて思い浮かぶのは、太郎と花子が同時に転び、「なぜあなたたちは転んだのか」と問うと、二人から「びっくりしたからだ」という答えが返ってくる、というようなものである。

がピザハットのピザを食べている」という記述のもとで共同で⁵行われていることなど存在しない。(2) 太郎が、二人がピザハットのピザを食べていることを観察によって初めて知った場合。この場合、たしかに太郎は自分たちがピザハットのピザを食べていることを知っていたのだが、そのことをたとえばパッケージを見ることによって初めて知ったとする。このときにも、「太郎と花子がピザハットのピザを食べている」という記述のもとで共同で行っていることなど存在しない。(3) 柏端は共同行為に関して特徴的な、「なぜ」の問いが拒否される場合を挙げている。それは「こいつらとっしょにしないでくれ」という反応に典型的な、「主語の複数性そのものの否定」の場合である(柏端, 2007: 150)。たとえばピザの例なら、たしかに太郎と花子は同じ一枚のピザを食べていたのだが、どちらも分け合うつもりはなく、むしろ独り占めしたいと考えているとする。こうしたときには上のような反応が十分に考えられる。そしてそのようなとき、太郎と花子の間で共同行為は成立していない。

以上では、第一に、「なぜあなたたちはφするのか」という問いがある人々によって拒否されないとき、その人々はφという記述のもとでの共同行為をしていると言えることを見た。第二に、どのような場合に「なぜ」の問いが拒否されるかに関して、三つの場合を挙げた。もちろんこのリストは網羅的なものではない。だが私はここに一つの問題点を見てとる。それはリストが網羅的でないことに対してのものではなく、もしリストを網羅的にしていけば見つかるであろうものである。それはアンスコム規準*に対する反例であり、「なぜ」の問いが拒否されるにもかかわらず、共同行為が成立している事例である。先の第一の点は、双方向の矢印で記されたアンスコム規準*のうち、次の片方向しか示していなかった。

⁵ ここで私は「共同で」を、「意図的に」と同様、ある記述のもとでのみ適用可能な語として用いる。これは柏端の用語法に負う所があるが(柏端, 2007: 149)、しかし後述するように、私は必ずしも「共同で」は共同行為の存在を示す(ibid, 傍点引用者)わけではないと考える点では、柏端と異なる。

x は ϕ という記述のもとで a、b、c...による共同行為である $\vdash x$ についての「なぜあなたたちは ϕ するのか」という問いが a、b、c...の誰によっても拒否されない

だがアンスコム規準*が十全に成り立つには、逆方向の条件文も真でなければならぬ。次節では、この条件文が必ずしも成り立たないことを示すケース、すなわち、「なぜ」の問いが拒否されても共同行為が成立しているケースを示す。

2.2. アンスコム規準*に対する反例

ϕ という共同行為が成立しており、かつ「なぜあなたたちは ϕ するのか」という問いが拒否されないケースの例としては、すでに雪かきの例を挙げた。つまりそこでは、a と b と c の三人による雪かきという共同行為が行われており、かつ「なぜあなたたちは雪かきをするのか」と問えば、三人のうちの誰からも適切な答えが得られるのであった。だがこのようなケースは珍しくはないとしても、一般的なものではなく、ある条件下においてのみ成り立つ特殊なものにすぎない。たとえば今の雪かきの例で「なぜあなたたちは雪かきをするのか」という問いが拒否されないのは、雪かきという共同行為が、三人で車を動かすという別の共同行為を目的として行われていたからである。では共同で行われた雪かきが、三人で車を動かすという別の共同行為を目的としていたのではなく、その雪かきに参加する理由が、a、b、c のそれぞれで異なっていたらどうか。たとえば、a は自分だけが乗っていた車が雪だめにスタックしたために雪かきに参加しており、b は自宅前の通りを綺麗にするために雪かきに参加しており、c は雪の下に埋蔵金があると思って雪かきに参加しているとする。このとき、たとえば a に「あなたたちはなぜ雪かきをしているのか」と尋ねても、せいぜい「他の者がなぜ雪かきをしているのかは知らないが、とにかく私は車を動かすために雪かきをしている」という答えが返ってくるにすぎないであろう。同様のことは b と c についても言え、これらは「なぜ」の問いを拒否

するケースを構成すると考えられよう。このことは a、b、c が互いの参加の理由について知っていたとしても変わらない。⁶

三人が雪かきに参加する理由が異なる上の例においても、三人が共同で雪かきをするということは十分可能である。たとえば a が車を動かすため、b が家の前を綺麗にするため、c が埋蔵金のために雪かきをするとしても、a が雪かきすべきエリアの右半分を担当し、b が左半分を担当し、c が a と b によってかき出された雪をさらに別の場所に運ぶ、といった仕方で互いに協力し合うことは可能である。⁷ したがって、 ϕ という共同行為が成立していながらも（目下の例では「 ϕ 」に「雪かきをする」が入る）、「なぜあなたたちは ϕ するのか」という問いが拒否されるようなケースが存在する。このケースはただちにアンスコム規準*への反例となる。

このようにアンスコム規準*に反例があるのだとすれば、個人による行為に関するアンスコム規準を、共同行為の場面に応用するという試みは失敗したのだろうか。もしそうなら、個人による行為とは異なり、共同行為は理由の概念と密接な関係にはないことになり、行為一般に関する統一的な理解は妨げられたことになるのではないだろうか。

⁶ さらに言えば——後の議論を先取りする形になるが——、たとえ三人の雪かきに参加する理由が同じであっても、そのことによって共同行為に関する「なぜ」の問いが拒否されないケースが構成されるわけではない。むしろ個々人の参加の理由が異なっても「なぜ」の問いが拒否されないケースは可能であり、個々人の理由がどうであるかは「なぜ」の問いが拒否されるかどうかとは無関係である。それと関係するのは、後述するように共同主体の有無である。

⁷ 三人が雪かきに参加する理由が異なる例は、たとえば M. ブラットマンが挙げる共同行為であるための規準を満たす (Bratman, 1993: 106)。その一部を例示すれば、三人は皆で雪かきしようという互いの意図について知っており、互いの意図ゆえに己の意図を持ち、そしてどのように雪かきするかに関する互いの計画をすり合わせる意図も持っている。また、同じ例は M. ギルバートが挙げる規準をも満たすだろう (Gilbert, 2000: 22)。たとえば a が自分の車を動かせるようになったからといって雪かきを途中でやめたならば、他の者から非難されるであろうし、a もその非難を当然のものとして理解するだろう。

3. 二種類の共同行為

そうはならないと私は考える。以下はまだアイデアのスケッチ段階のものにすぎないが、その大枠を示したい。共同行為には「なぜ」の問いを拒否するようなものがあるということは、共同行為には「なぜ」の問いを拒否するような種類のものがあるということではないだろうか。現に「なぜ」の問いを拒否するような共同行為は、拒否しない共同行為とは決定的な違いを示し、「なぜ」の問いを拒否するかどうかは単にランダムに決まるようなものではなく、ある一定の条件によるものであると考えられる。次節ではまずその二種類の共同行為の最初の特徴づけを行いたい。

3.1. 共同行為と理由

ある共同行為が「なぜ」の問いを拒否しないとき、そのことはその共同行為に理由がありうるということの意味する。もちろん本稿の第1節の末尾で述べたように、「なぜ」の問いが拒否されないことは、「特に理由はない」のような答えが返ってくるケースを排除しない。共同行為におけるそうしたケースの例としては、楽しくもないのに数人で地面にでたらめな絵を描いている例などが考えられるかもしれない。彼らに「なぜあなたたちはそんな絵を描いているのか」と尋ねれば、彼らは「特に理由はない」と答えるのである。だがこのことによって「なぜ」の問いが拒否されたことにはならない。そうした訳で、「なぜ」の問いが拒否されないような共同行為について、「理由がある」と言う代わりに「理由がありうる」という表記を用いた。そしてその特徴づけは「なぜ」の問いを拒否するような種類の共同行為との対比を明確にする。すなわち、「なぜ」の問いを拒否する共同行為には理由がありえない。先述の例のように、aとbとcが共同で雪かきをしているが、aは車を動かすために、bは自宅前を綺麗にするために、cは埋蔵金のために雪かきに参加しているとき、「なぜあなたたちは雪かきをしているのか」と三人に尋ねても適切な答えは返ってこないのであった。これは数人で地面に落書きして「特に理由はない」と答えられるケースとは異なる。

理由がありうる共同行為の方は、さらに理由がある場合 (①・②) と、理由がない場合 (③) の三通りに分けられる。① ある共同行為が、別の共同行為を目的として行われる場合、その共同行為には理由がある。この場合についてはすでに上で見た。その例は、a、b、c の三人が乗っていた車が雪の中スタックしたので、三人で車を動かすために、三人で雪かきをするというものであった。② 第二の場合は新しく指摘するものであるが、それは、ある共同行為がそれ自体を目的として行われる場合である。たとえば、交通事故に遭った人の命を複数の人々が協力して救おうとするとき (一人は応急処置を行い、他の一人は電話で救急車を呼び、別の一人は交通整理を行う)、皆でその人の命を救うということは何か他の共同行為のためになされているわけではなく、それ自体のためになされており、その意味で理由をもつ。③ 第三の、共同行為に理由がない場合についてもすでに見た。その例は、ただ何となく数人で地面に落書きをするというものであった。そしてそれはその状況では理由がなかったが、別の状況であれば理由があったかもしれないという意味で (たとえば落書きは彼らの共同の芸術活動だったかもしれない)、理由がありうる共同行為なのである。

最後の理由がない共同行為と、理由がありえない共同行為とは、一体何が異なるのであろうか。より一般的には、理由がありうる共同行為と理由がありえない共同行為との間の違いは何だろうか。次節以降でその点に関する説明を試みたい。

3.2. 一つの全体的な行為の有無

ある共同行為が「なぜ」の問いを拒否するとき、そうであるのは、そこに理由を問われている当のものが~~ない~~からではないだろうか。そしてもしそのように理由を問われているものがなければ、そこに単に理由がないだけでなく、ありえなくなるということは、よく理解できるところとなるだろう。より詳しく言えば、ある共同行為について「なぜ」の問いが拒否される場合には、その共同行為に参加する個々人による複数の行為を部分として含みながらも、~~数的には一つの全体的な行為は存在しないと~~考えられる。⁸ 三人がそれぞれ異なった

⁸ 行為に関する部分全体関係については、柏端 (2007: 125-44) に詳しい。

理由で雪かきに参加する先の例では、a、b、cによる個々の行為が存在するだけで（aはエリアの右半分の雪かきをし、bは左半分の雪かきをし、cは二人によってかき出された雪を別の場所に運ぶ）、「なぜあなたたちは雪かきをするのか」と問うような一つの全体的な行為が存在するわけではない。そして理由を問われている当のものが存在しないゆえに、その問いは拒否されるのである。

これに対して、「なぜ」の問いを拒否しないような種類の共同行為においては、それに参加する個人による行為を部分として含む一つの全体的な行為が存在すると考えられる。そしてそのように理由を問う当のものが存在するゆえに、そこに理由があつたりなかつたりすることができるのである。

3.3. 共同主体の有無

二種類の共同行為の特徴づけとして、理由がありうるかありえないかの違いに加えて、一つの全体的な行為が存在するかどうかの違いがあるという論点は少し分かりにくいものであるかもしれない。ただもし次の柏端のテーゼを受け入れるならば、一つの全体的な行為が存在するということから、それに対応した一つの行為者が存在するということが出てくる（柏端, 2007: 135）。

一つの行為に対して正確に一つの行為者が存在する。⁹

このテーゼを私はもっともらしいものとする。そして一つの全体的な行為に対応した一つの行為者を共同主体と呼ぶことにすれば、以上のことから次のことが帰結する。すなわち、「なぜ」の問いを拒否しないような種類の共同行為とは、共同主体が存在するような共同行為であるのに対し、「なぜ」の問いを拒否するような種類の共同行為とは、共同主体が存在しないような共同行為である。

共同主体の役割を一つ指摘しておけば、それは共同主体が「なぜあなたたちはφするのか」という問いにおいて問いかけている者であり、またその問

⁹ 柏端も指摘しているとおり、逆は成り立たない。一つの行為者に対して一つの行為しか存在しないわけではない。

いに答える者だということである。たとえば本稿 3.1 の理由がある①の場合の例 (a と b と c が三人で車を動かすために三人で雪かきをする) において、「なぜあなたたちは雪かきをするのか」と問われ、a が「車を動かすためだ」と答えるとき、a は自分が雪かきに参加した個人的な理由を個人的に述べているのではなく、全体の理由を全体の代表として述べているのである。いわば a はそこで共同主体の声を代弁しているのであって、「あなたたち」によって名指され、問いかけられ、それに (a の口を借りて) 答えているのは、あくまで共同主体である。「なぜ」の問いを拒否しない共同行為について理解するとき、われわれはそのように共同主体の存在を想定している。

これに対して、三人がばらばらの理由で雪かきに参加している例では、「なぜあなたたちは雪かきをしているのか」と問うても、誰も代弁すべき相手を持たないのである。そうして問いは拒否される。以上の議論をまとめると、次のような表が得られるだろう。

	理由	一つの全体的な行為	共同主体
「なぜ」の問いを拒否しない共同行為	ありうる	ある	ある
「なぜ」の問いを拒否する共同行為	ありえない	ない	ない

3.4. 行為一般の統一的理解

では本稿 2.2 の最後で示された、個人による行為に関するアンスコム規準を共同行為に応用する試みは失敗したのではないか、という疑念に関してはどうなったのだろうか。もしその試みが失敗したのであれば、行為一般に関する統一的理解は妨げられたことになる。

だが私はそうはならないと述べた。最後に簡単ながらもこの点について述べておこう。以上の説明によれば、「なぜ」の問いを拒否しないような種類の共同行為と拒否するような種類の共同行為は、同じ「共同行為」の名で呼ばれていても存在論的には全く異なった種類の行為である。つまり、前者は単に複数

の個人による複数の行為からなるだけでなく、それらを含む一つの共同主体による一つの全体的行為であるのに対し、後者は単に複数の個人による複数の行為からなるにすぎない。したがって後者が「なぜ」の問いを拒否し、アンスコム規準*に反するのは当然のことなのである。というのも、「なぜ」の問いを拒否するような種類の共同行為は、存在論的には個人による行為と同種のものであり、それはアンスコム規準*ではなく、個人による行為に関するアンスコム規準の方を満たすべきものだからである。そして「なぜ」の問いを拒否する共同行為は、後者の規準を実際に満たす。三人がばらばらの理由で雪かきに参加している例では、三人の誰に「なぜあなたは雪かきをしているのか」と問うても、適切な答えが返ってくるだろう。

もちろん、「なぜ」の問いを拒否するような種類の共同行為を個人による行為と同種のもとと見なしたからといって、全ての点に関して両者が等しいわけではないこともまた当然である。両者は個人による行為からなるにすぎないという点では一致しているが、まずもって行為者の数において異なる。個人による行為の行為者は一人だが、「なぜ」の問いを拒否する共同行為の行為者は複数いる。さらに、たとえ個人の行為者が複数いても、たとえば a と b と c が偶然同時に同じエリアの雪かきをしているが、そこにはいかなる協力もないというように、単に複数の個人による行為が共起しているにすぎないケースとも、「なぜ」の問いを拒否する共同行為のケースは異なる。両者の違いについてはこれまで様々に論じられてきた。¹⁰

このように「なぜ」の問いを拒否する共同行為が、個人による行為からなるにすぎない種々のものと大きな違いを示すとしても、それはなお個人による行為からなるにすぎないものの一種であると私は考える。したがって、アンスコム規準*に反するような種類の共同行為があるとしても、それはむしろ個人による行為に関するアンスコム規準を満たすべきものであり、そしてそれは実際に後者の規準を満たすのであるから、行為一般に関する統一的な理解は妨げられていないと私は考える。

¹⁰ 注7 参照。

4. 結語

本稿では個人による行為に関して認められるアンスコム規準を、共同行為の場面にまで応用することは可能かという問題意識のもとで論が進められた。結果、共同行為には「なぜ」の問いが拒否されるような場合があることが分かった。本稿はそれに対し、共同行為には、「なぜ」の問いを拒否しない種類のものと拒否する種類のものがあると考え、両者の違いを最終的に共同主体が存在するか否かの違いとして説明した。そして「なぜ」の問いを拒否する種類の共同行為は、個人による行為からなるにすぎないものの一種であるため、アンスコム規準*ではなく個人による行為に関するアンスコム規準の方を満たすべきものであると考え、アンスコム規準*への反例によって行為一般に関する統一的理解は妨げられていないと結論づけた。もちろん、二種類の共同行為の違いを説明するためになされた本稿の議論はとても十分なものとは言えないが、¹¹しかし次のことは確かに言えるだろうと思われる。共同行為には「なぜ」の問いを拒否するようなケースがあること、そして、いかなる共同行為についての理論もこのケースに対し何らかの説明を与えなければならないこと。本稿はその説明の試みとして書かれた。

文献

- Anscombe, G. E. M. (1957) *Intention*, 2nd ed., Harvard University Press, 2000. (菅豊彦訳『インテンション』産業図書, 1984年.)
- Bratman, M. (1993) "Shared Intention," *Ethics* 104, 1, 97-113.
- Gilbert, M. (1990) "Walking Together: A Paradigmatic Social Phenomenon," *Midwest Studies in Philosophy* 15, 1-14.
- Gilbert, M. (2000) "What Is It for Us to Intend?," in her *Sociality and Responsibility: New Essays in Plural Subject Theory*, Rowman and Littlefield, 14-36.

¹¹ したがって、「集団はいつ行為者となるか」（本稿の言い方によれば「共同主体はいつ存在するか」という本報告書所収の論文（筒井, 2014）で筒井が取り組んでいる問題は、本稿が今後の課題としなければならないものである。

- 柏端達也 (2007) 『自己欺瞞と自己犠牲：非合理性の哲学入門』，勁草書房。
- 片岡雅知 (2013) 「共同行為の説明に関する個人主義」『哲学・科学史論叢』15，東京大学教養学部哲学・科学史部会，85-107.
- Roth, A. S. (2010) “Shared Agency,” in Edward N. Zalta (ed.) *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <http://plato.stanford.edu/entries/shared-agency/> (accessed December 20, 2013).
- 竹内聖一 (2011) 「アンスコム条件と共同行為」『行為論研究』2，行為論研究会，37-62.
- 筒井晴香 (2014) 「集団はいつ行為者となるか：P. プティットの議論に見る集団行為者の関係的性格」本報告書所収，85-111.

(すずき ゆうだい／東京大学)